

2月4日（木）

◆アクアマリンふくしま

環境水族館アクアマリンふくしまにおいて、被災から再開までの道のりについて担当者からお話を伺い、理解を深めた。研修生は水族館内を見学し、水槽で泳ぐ魚と写真を撮ったり、屋外の蛇の目ビーチまで足をのばしたりと時間いっぱいまで楽しんだ。



被災・復旧状況についての講義

◆アグリパークいわき観光いちご園

東京電力福島第一原発事故の風評被害を農業の力で吹き飛ばそうと頑張っている地元農家の方のお話を聞いた。その後、いちご園でイチゴ狩りを楽しんだ。甘くて大きいイチゴに『自分の国のイチゴよりおいしい』と満足した様子だった。



◆スパリゾートハワイアンズ

東日本大震災後、観光施設の立場からの苦勞した思いや、復興のシンボルとして積極的に活動しているフラガールや現在について、担当者からお話をうかがった。また、常磐炭鉱時代からの歴史についても学ぶこともでき、自分の父親が幼い頃、常磐炭鉱の長屋に住んでいたという研修生は、家族の歴史に触れることができるとも感動していた。



担当者の説明



ショーや温泉を楽しみました

2月5日（金）

◆白水阿弥陀堂

最後の視察先は、県内唯一の国宝建造物である白水阿弥陀堂。研修生たちはお坊さんに国の重要文化財である仏像やお堂の中を案内してもらい、庭園を散策して楽しんだ。



結びに

本研修は平成 18 年度から始まり、今回で 8 回目の実施となった（平成 23～24 年度の東日本大震災の影響により中止）。研修生は母県訪問により自らのルーツを再確認することで本県との絆を感じ、また、復興に向けての取り組みや現状を実際に見ることで、福島についてより理解を深めてもらえたものと思われる。

11 月に国際課員が南米（ブラジル、アルゼンチン、ペルー）を訪問しセミナーを行ったことで、県人会員の本県に対する不安は払拭されつつあるが、訪問できなかった国の参加者には食の安全についての不安があったようだ。『百聞は一見に如かず』—実際に来て、見て、学ぶことで、本県の正しい情報を母国へ持ち帰り、そして、広く海外に伝わることを期待したい。

今回の研修は日本語/英語で実施したが、母国語のポルトガル語やスペイン語を挟みながら言葉の問題をお互いに補い、協力し合って理解しようとする姿が印象的だった。蒔絵やなぎなたなどの日本文化を楽しみ、スキー体験をとおして季節を感じることもでき、研修生は福島への興味をより一層深めたと思う。

祖先の「移住」により、福島から遠く離れた海の向こうで生活を送ることになった研修生とその家族。その心はいつまでもふるさと「福島」を想い続けていることを、過去の歴史も含め決して忘れることなく、今後も県人会との協力関係を築いていくことが大切だと感じた。